

(論文内容の要旨)

本研究は、自分の中にありながら自分のものとは思えないあるいは思いたくない「異質な自分」を、人はどのように自らの中に位置付け、関わっているのか、特にそれが重要なテーマとして顕在化する青年期において、どのように感じられているのかということ、を、「関わり」という観点から捉えよう試みたものである。

まず第1章では、これまでの理論について概観し、「自分」ということの中には、自分が自分に「関わる」ということが含まれているということから、「異質な自分」について考える際に、「関わり」という側面に着目することの意義が示された。そして、「異質な自分」の持つ、自分の中にありながら自分とは思えないといった中間的な性質は、自分の中に様々な力動を生じさせることが示唆され、その力動を抱えておけるだけの力が必要とされると同時に、その存在を抱えておくこと自体が重要な意義を持つのではないかということが指摘された。

続く第2章では、「本当の自分」「借り物の自分」という、どちらかというと並列的なイメージとして投げかけられた二つの「自分」の関係性イメージを探った。その際、より動的な関係性を捉えるための方法として、「本当の自分」を表す円を呈示し、そこに「借り物の自分」を描き加えてもらうという描画法を新たに考案し用いている。その結果、「借り物の自分」と感じる時というのは、ほとんどが対人場面であり、他人に合わせたり他人の意志で動いたりするような状態の自己イメージであることがうかがわれ、一方「本当の自分」と感じる時というのは、自分の気持ちや思いに従ったあり方であり、自分の気持ちや存在の確認であることがうかがわれた。

さらに第3章では、「自分」に対する問いかけを、「本当の自分」と「本当の自分ではないような自分」としてより広く設定して調査を行った。その際、動的な「本当の自分」を抽出するために、第2章で実施した方法に加えて、箱庭による表現や面接法を採用した。「本当の自分ではないような自分」イメージについては、外界との関係でそう感じられるものと、外界とは無関係に感じられるものが認められた。「本当の自分」については、「自分を見つめる時」や「何も考えないで行動する時」など一見逆の状態を表しているようにも思われるカテゴリーが含まれていた。

これらの結果を踏まえて、第4章では、被調査者の語りを中心に、言語表現（自由記述）、描画表現、箱庭表現を、一人の人について横断的に分析し、個人の中で「異質な自分」がどのように生きているのかを、より動的に捉えることを試みた。本章でとりあげられた6人の箱庭表現を見たとき、異なる自分を位置付けるために中心や核といったものが重要な役割を果たしていることが示唆された。

そして、第5章では、これらの結果や被調査者の反応や表現をもとに、「異質な自分」との関わりについて、改めて総合的に考察した。特に「異質な自分」との関わりから生まれる力動性について、1) 時間軸の役割、2) 「異質な自分」について語る

とはどういうことか、3) 内なる他者としての「異質な自分」とその両価性、4) 「異質な自分」を自分の中に位置付ける視点という観点について考察した。

最後に、「異質な自分」には、本研究で抽出されたもの以外に、身体的なものや無意識の領域のものなど、様々なレベルのものが含まれるように思われるため、こうしたものについても探っていくことを今後の課題として呈示した。

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、自分の中にありながら自分のものとは思えないあるいは思いたくない「異質な自分」を人はどのように自らの中に位置付け、関わっているのか、特にそれが重要なテーマとして顕在化する青年期において、どのように感じられているのかということ、を、「関わり」という観点から捉えよう試みたものである。

まず「第1章」では、これまでの理論について概観し、「自分」ということの中には、自分が自分に「関わる」ということが含まれているということから、「異質な自分」について考える際に、「関わり」という側面に着目することの意義が示された。そして、「異質な自分」の持つ、自分の中にありながら自分とは思えないといった中間的な性質は、自分の中に様々な力動を生じさせることが示唆され、その力動を抱えておけるだけの力が必要とされると同時に、その存在を抱えておくこと自体が重要な意義を持つのではないかということが指摘された。

続く第2章では、「本当の自分」「借り物の自分」という、どちらかというと並列的なイメージとして投げかけられた二つの関係性イメージを探っている。その際、より動的な関係性を捉えるための方法として、まず、「本当の自分」を表す円を呈示し、そこに「借り物の自分」を描き加えてもらうという、新たな手法を考案している点が、本研究のユニークなところだといえる。その結果、「借り物の自分」と感じる時というのは、ほとんどが対人場面であり、他人に合わせてたり他人の意志で動いたりするような状態の自己イメージであることがうかがわれ、一方「本当の自分」と感じる時というのは、自分の気持ちや思いに従ったあり方であり、自分の気持ちや存在の確認であることが実証された。

さらに、第3章では、「自分」に対する問いかけを、「本当の自分」と「本当の自分ではないような自分」としてより広く設定して調査を行った。その際、動的な「本当の自分」を抽出するために、第2章で実施した方法に加えて、箱庭による表現や面接方法を採用している。その結果、「本当の自分ではないような自分」イメージについては、外界との関係でそう感じられるものと、外界とは無関係に感じられるものが認められ、一方、「本当の自分」については、「自分を見つめる時」や「何も考えないで行動する時」など、一見逆の状態を表しているようにも思われるカテゴリーが含まれていた。このように、第2章から第3章へと、「異質な自分」へのアプローチにおける「深化」が認められる。

これらの結果を踏まえて、第4章では、被調査者の語りを中心に、言語表現（自由記述）、箱庭表現、一人の人について横断的に分析し、個人の中で「異質な自分」がどのように生きているのかについて、より動的に捉える試みが成された。本章でとりあげられた6人の箱庭表現を通観したとき、箱庭のなかに、なんらかの「中心になるもの」がおかれていた。このように異なる自分を位置付け、かつ内的な安定をもたらすうえで、中心や核になるものが重要な役割を果たしていることが示されたのは、興味深い結果といえよう。

そして、第5章では、「異質な自分」との関わりについて、改めて総合的に考察している。特に、「異質な自分」との関わりから生まれる力動性に関して、1) 時間軸の役割、2) 「異質な自分」について語るとはどういうことか、3) 内なる他者としての「異質な自分」とその両価性、4) 「異質な自分」を自分の中に位置付ける視点という観点から考察を行った。

試問においては、「異質な自分」とは、「内なる他者」とどのように異なるのかを問われ、また、青年期における「異質な自分」というテーマであれば、「自意識」との関わりをもっと明確にとりあげるべきではなかったか、という指摘がなされた。さらに、この研究がどのように臨床に役立つのか、さらに深めて欲しいという要望も出された。しかし、興味深くもとらえがたいテーマに対して、実証的な手法で迫ったことは意義あるアプローチであり、本論文の意義を損なうものではないと考えられた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成21年5月14日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。